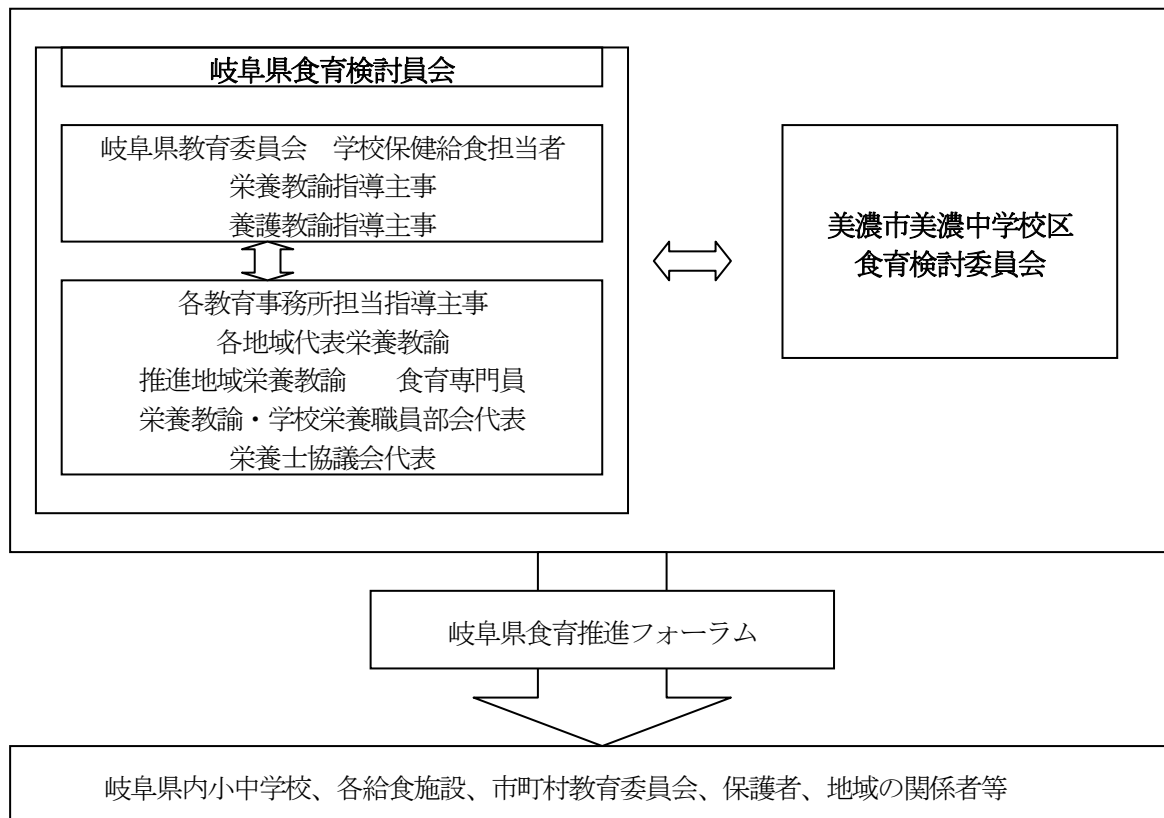


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	岐阜県
再委託先名	美濃市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ	地域ぐるみの食育推進体制の整備による学校・地域の特色を生かした食に関する指導の充実
<p>(1) 地域ぐるみの食育推進体制の整備</p> <p>①子どもの食生活の改善を図るための学校を中心とした食育の指導体制づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学校の食育推進体制整備の支援 ・学校、家庭、地域が連携した食育の指導体制整備の支援 <p>②地域ぐるみで家庭の望ましい食生活の実践を支援する体制づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の食育推進体制整備の支援 ・地場産物活用のための体制整備の支援 <p>(2) 学校・地域の特色を生かした食に関する指導の充実</p> <p>①児童生徒が望ましい食習慣や食に関する正しい知識・食の選択能力等を身に付けるための学校の教育活動全体を通した食に関する指導の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食に関する指導の全体計画及び食に関する指導の年間計画の活用推進 ・教科等の関連を図った食に関する指導の推進 	

- ・学校の組織を活用した指導の推進
- ②家庭の食習慣を改善するための保護者への啓発の工夫
 - ・PTA 各種委員会との連携した取組への支援
 - ・食育だより、HP などによる啓発活動の支援

テーマの具体的計画

(1) 地域ぐるみの食育推進体制の整備

①岐阜県食育検討委員会の開催

- ・構成：スポーツ健康課指導主事、各教育事務所食育担当指導主事、各地区栄養教諭代表、学識経験者等で構成する。
- ・内容：各地区の食育推進体制の実態を把握する中で、市町村及び地域の推進組織・体制の立ち上げに関する課題の支援の在り方、今後の食育施策を検討する。

②関係機関・団体との連携

- ・お弁当の日等を通じた家庭との連携を支援する。
- ・学校給食における地場産物の活用を促進するため、生産者や行政との連携の支援や地場産物を使った物資の開発等に協力する。（農政課、畜産課、(財)岐阜県学校給食会等）
- ・幼稚園、高等学校の食育を支援する。（保健医療課、学校支援課、学校保健会等）

(2) 学校等における食に関する指導の充実

①先進的な実践指導

- ・機会：地域食育推進事業指定校への指導助言
- ・内容
 - ア) 「地域食育推進事業」において、幼稚園（保育所）、中学校を含めて地域を指定、学校と家庭、地域の連携による地域ぐるみの食育実践について指導助言を行う。
 - イ) 地域における食育推進体制を生かし、発達の学び、生活の連続性を踏まえた体系的な指導プログラムの作成、学校給食を生きた教材として活用した指導の充実、学校給食における地場産物の活用の促進等について指導助言を行う。

②事例研究による望ましい食育推進の方向性の明確化

- ・総合的学習の時間と関連した食に関する指導

- ア 日本の伝統的な味噌汁づくりの体験を通して、子どもたちの味覚を育て、望ましい食習慣を身に付ける取組
- イ お弁当作りを通し、食の大切さを家族と一緒に考える取組



- ・校内の指導体制の整備

食生活に関心を持ち、健康的な食生活の在り方を考え、実践できる生徒の育成

- ア 健康保健指導委員会と食育推進委員会を機能させた食に関する指導の整備
- イ 各教科における指導計画の工夫改善を図る取組



- ・家庭、地域と連携した活動の充実

望ましい食生活の在り方を理解し、実践できる生徒の育成

- ア PTA・母親委員会・家庭教育学級と連携した取組
- イ 「親子ふれあい手作り弁当の日」を通して、食生活の工夫改善を図った取組



・学校、家庭、地域の連携

自らの食生活を良くしていこうとする生徒の育成

ア 担任への情報提供と担任による食に関する指導の取組

イ 家庭への情報提供とPTAと連携した研修会の取組

ウ 生徒委員会活動を生かした地域生産者等との交流を図った取組



・学校、家庭との連携を図った栄養教諭の役割

望ましい食生活の実現に向けて実践する生徒の育成（弁当の日を通して）

ア PTAの活動と学校給食の関連を図った取組

イ 生徒委員会活動による食べ残しゼロの取組

ウ 家庭科の授業と給食の関連を図った取組



・学校、家庭、地域を結ぶ食育コーディネーターとしての栄養教諭の役割の追及

児童が生涯にわたりよりよい食生活を送るための効果的指導について

ア 図書館教育や児童委員会活動を通じた食に関する指導の取組

イ 食育通信による情報提供と母親委員会と連携した夏休みの取組

ウ 地域講師と連携した体験的な食に関する指導の取組



(3) 食育推進フォーラムにおける実践の成果の普及啓発

①地域食育推進事業指定校からの実践成果の報告と研究協議

- ・教科等の関連を図り、学校の教育活動全体を通して行う食に関する指導について
- ・家庭の望ましい食生活を支援するための学校・家庭・地域の連携について
- ・食育推進体制を整備するための栄養教諭の食育リーダーとしての役割について

②学校、家庭、地域のそれぞれが果たすべき役割や連携の在り方について

- ・学校、家庭、地域の役割について
- ・広げる、続ける、つなげる食育について

数字で変化のあった事項について

(1) 地域ぐるみの食育推進体制の整備

- ・学校・家庭・地域が連携した各地域の様々な取組により、地域の良さを改めて知るとともに生産者や地域の産物についての理解が深まり、食べ物を大切にしたり、作ってくださる人に感謝の気持ちをもてたりするようになった。
- ・岐阜県食育推進フォーラム等を通して、学校での食育の実践成果や今後の食育の進め方などを示すことによって、教職員、家庭、地域の関係者の理解が深まるとともに、学校での食育が家庭で話題になったり、地域や家庭の協力を得た体験活動を取り入れたりすることができた。

<岐阜県内市町村食育推進計画の作成状況>

平成22年3月 11市町村 (26.2%) → 平成23年3月 15市町村 (36%)

(2) 学校等における食に関する指導の充実

<学校給食等実態調査>

- ・朝食を週に4日以上食べていない中学生が減少した。

平成21年 1.4% → 平成22年 1.3%

- ・朝食を家族と食べる割合が上昇した。

小学生 平成21年 78.1% → 平成22年 78.6%

中学生 平成21年 56.4% → 平成22年 58.1%

・給食を全部食べられた子どもの割合が上昇した。

(主食)

小学生	平成21年	93.3%	→	平成22年	94.9%
中学生	平成21年	92.8%	→	平成22年	94.2%

(牛乳)

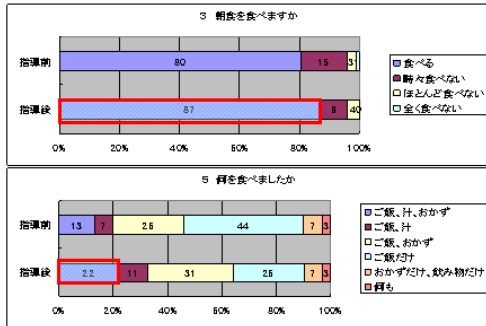
小学生	平成21年	98.0%	→	平成22年	98.3%
中学生	平成21年	95.6%	→	平成22年	96.2%

(おかず)

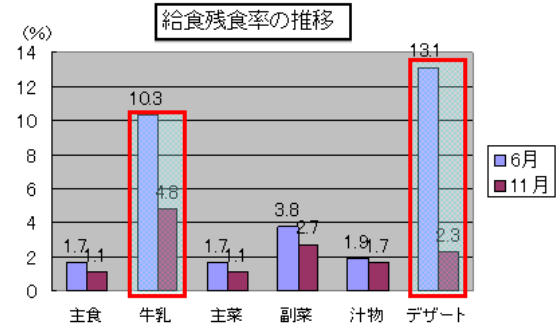
小学生	平成21年	92.5%	→	平成22年	93.8%
中学生	平成21年	92.9%	→	平成22年	93.8%

・西濃地区 中学校
担任による指導の効果

授業後、朝食を毎日食べる生徒が増加



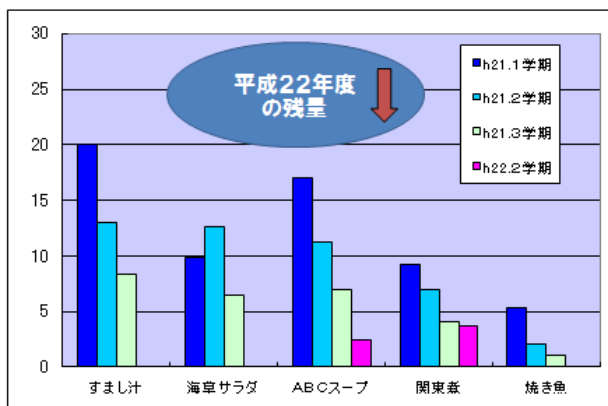
給食を食べきる生徒の増加



・飛騨地区 中学校

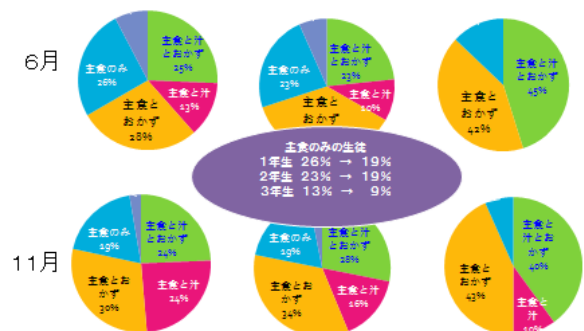
給食主任との連携による指導の効果
給食の残量の減少

残量調査結果



朝食内容の改善

朝ごはんはおもにどんな内容ですか



事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 1 学校の指導体制の整備と食に関する指導年間計画に基づいた計画的な指導
 - ・年間計画における各月の給食の時間と教科等との関連を明確にした上で、各領域の特性やねらいを踏まえた指導を行うことができるようになってきたこと。

- ・教職員の共通理解を図り、栄養教諭だけではなく学級担任が指導できる食育の推進に取り組めたこと。
- ・学級担任が日常的に食に関する指導ができるよう、食育だよりなどの指導資料を作成したこと。
- ・児童生徒会活動を通して、自分たちで食への関心を高め食生活を改善するための働きかけをしていくことで、実践への意欲が高まったこと。

2 体験学習とPTAや家庭との連携

- ・食育活動を活用した交流会や研修会、調理実習、食育だより、HPなどで学校からの情報発信や啓発に努めた結果、学校の願いや活動について理解が得られるようになり、家庭との協力体制を築くことができたこと。
- ・児童生徒が授業で学んだことを家庭に伝えることで、子どもを通して保護者への啓発を図り保護者の意識を高め、家庭での実践につなげたこと。
- ・調理実習やお弁当の日など、子どもが自分で調理をする体験を通して、食事作りの大変さを知り、食事を作ってもらえることに感謝の気持ちをもつことができるようになったこと。

3 地域との連携

- ・生産者の方と交流することによって、野菜作りの大変さや地場産物の良さを知り、野菜を大切に食べていこうという気持ちをもつことができたこと。
- ・生産者と連携をとることによって、地元の食材が多く取り入れることができるようになったこと。
- ・地域の講師と連携した体験活動により、地域の食文化への理解が深まったこと。

以上のようなことから、子どもたちが食に関して感謝の気持ちをもつことや健康的な食生活を送ろうとする意識が高まり、給食の残量や朝食欠食者が減少した。

また、子どもたちを通して、家庭でも健康を考えたバランスの良い食事を摂ることに関心が高まり、朝食内容の充実にもつながった。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

(1) 地域ぐるみの食育推進体制の整備

- ・依然として食事を子ども一人で食べている孤食などの問題があるので、食を通して、家庭でのコミュニケーションの機会や一家団欒の場を提供し家族がふれあえるような取組にする必要がある。
- ・子どもの食習慣を改善するためには、食を通して、学校、家庭、地域がつながり一体となって子どもを育てていくことが必要であり、学校や家庭等の役割を考えながら、学校で学んだことを家庭で実践し、子どもの行動が変容するように継続した取組を行わなければならない。また、子どもを通して家庭や地域が主体的に食育に取組んでいくよう働きかけていく必要がある。

(2) 学校等における食に関する指導の充実

- ・食に関する指導の年間計画は、給食の時間と教科等の関連を明確にして各領域の特性やねらいを踏まえるとともに、幼保小中学校の連携を図りながら発達段階を踏まえた内容となるよう見直し、継続的な指導ができるようにしていく必要がある。
- ・継続した指導をするためには、子どもならではのアイデアを生かした、子どもが主体的に興味をもって取り組めるような魅力のある活動にしていく必要がある。

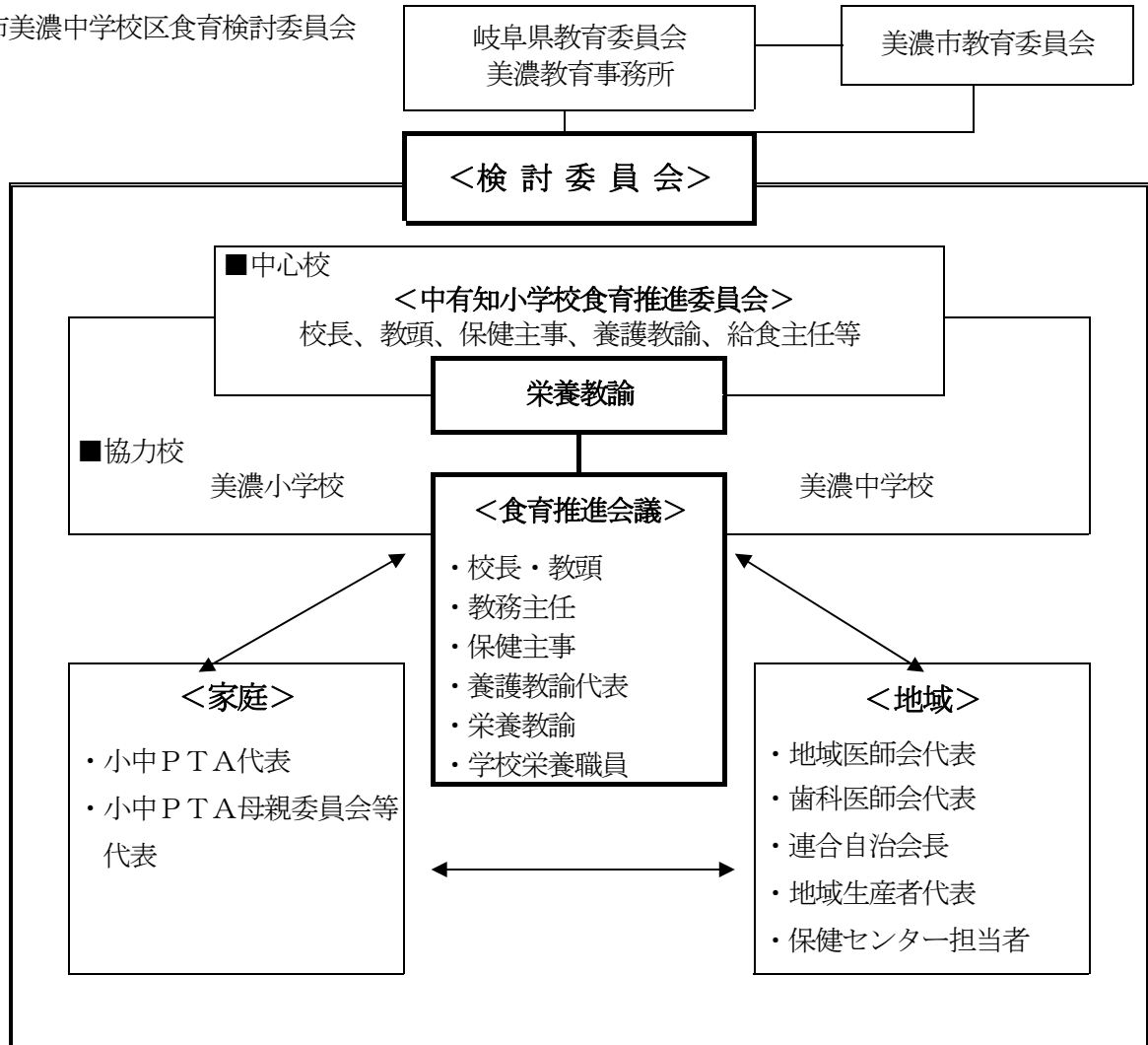
(3) 栄養教諭のコーディネーターとしての役割

- ・食に関する指導を効果的に行うためには、組織的な取組をする必要があり、栄養教諭の連携調整能力を高める研修や各地域での実践を交流する機会を設けていかなければならない。
- ・子どもの生活環境・食環境はそれぞれ違うので、望ましい食習慣や食に関する正しい知識・食の選択能力等を一人ひとりに身に付けるためには、それぞれの食生活や実態等に基づいた個別的な指導が必要である。

再委託先名	美濃市
-------	-----

1. 事業推進の体制

美濃市美濃中学校区食育検討委員会



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科や特別活動等における食への関心、食習慣改善への取組

1 学校の教育目標の具現に向け、食に関する全体計画及び年間指導計画を充実させながら、各教科や特別活動等を関連付け、栄養教諭を効果的に位置付けた指導を行う。

①地域との連携を図った活動や、各教科、特別活動等との関連をもとに付けたい力を明確にし、栄養教諭がコーディネーターとなって指導を行う。

<指導事例> 4年生 学級活動『おやつを見直そう』（7月）

～おやつに関する正しい知識をもち、
望ましい食習慣の実践につながる指導～

○ねらい：おやつにふくまれる砂糖、油、カロリー量について理解するとともに、その知識を使って、自分の生活を見直し、望ましいおやつの摂り方をしていこうとする意欲をもつことができる。



食に関する学級活動

○付きたい力：知識の理解、資質・能力の向上

○授業の概要：まず、事前に行った児童のおやつ調べの結果から、ふだん食べているおやつに含まれている油の量と砂糖の量について、実態を知る活動を行った。次に、各自が食べているおやつのカロリー量を示し、「4年生児童にとって1日に必要なカロリー量」と比較することで、おやつを食べる目安の量を考えさせた。そして、おやつを食べる量の目安としてカロリーや成分表示の見方について学習した。授業の最後に、本時に学んだことをもとに、今後の生活の目当てを立てた。

○授業後の児童の感想：「これから200キロカロリー以上のおやつをたくさん食べずに、家族といっしょに食べたり、お皿に食べることでできる分だけのせたりして食べたいです。」「ぼくは、1回も200キロカロリーをこさなかったのよかったです。あまり砂糖を摂り過ぎなかったのよかったです。ぼくは、おやつ日記がなくても200キロカロリーをこさないようにしたいです。」

○事後指導：おやつ日記をつけるようにし、家庭と連携を図り継続的に指導を行った。

②朝の会、給食の時間、帰りの会、委員会等で栄養教諭が専門性を生かして食に関する指導を行う。

○「朝の会、給食の時間」における食に関する指導

「意欲付け」や「知識の理解」を付きたい力として、学級担任や栄養教諭が「食に関する指導の年間指導計画」に基づいた指導を行った。例えば6月では、食育月間として、朝食の大切さについて全学級にて指導を行った。

○協力校での「委員会活動」における食に関する指導

美濃中学校では、保健委員会が栄養教諭の作成した原稿をもとに、朝食の重要性や栄養バランスのある食事を摂ることの重要性について、お昼の放送を通して啓発活動を行った。それに合わせて、栄養教諭が「朝食の重要性」についての指導を全校集会で行った。

美濃小学校では、給食委員会によって「よくかんで食べることの大切さ」について取り組んだ。児童集会において給食委員会がその取組についての発表を行った後、栄養教諭が「かむことと体の健康」について補足説明をするとともに、児童会の活動に対する評価を行った。



協力校 児童集会での話

2 食物やその生産者、食事を作ってくださいの方々に対する感謝の気持ちを育てる指導を行う。

田植えや稲刈り体験、野菜の収穫と販売などを通して、生産者の苦労や工夫、食物に対する熱意を学ぶ。

○農業体験活動の実践

年間を通してさまざまな農業体験活動を行った。例えば、5年生の総合的な学習の時間「お米づくり」では、「5月：田植え、7月：下草刈り、9月：稲刈り」のように、体験活動を行った。このような活動を通して、お米が作られるまでの過程を学び、お米を生産する人の苦労や努力を知る学習をすることで、児童の生産者や作物に対する感謝の気持ちを育む指導を行った。

テーマ2

学校と家庭との連携による食習慣や生活習慣改善のための取組

1 食に関わるアンケート調査を進め、児童生徒や家庭における食に関わる課題を把握・分析する中で、課題解決のための方途を明確にして、家庭との連携を図る。(5月、10月、1月に児童及び保護者に対して調査を行った。)

①アンケート調査概要

・朝食の摂取状況について ・食事の好き嫌いの状況と対応について ・食事のマナーについて

②食に関わるアンケート調査による課題の把握・分析

5月の調査結果を分析したところ、実態のよさとして、朝食摂取が99%、食事の挨拶が96%であり、欠かさず朝食を摂取している家庭や挨拶をきちんとしている家庭が多いことが明らかとなった。一方、給食や食事の重要性の理解と実践力については課題として明らかとなった。

そこで、これらの課題を解決していく方途として、食に関する個への指導を充実させていくとともに、家庭への食育啓発活動を充実させていくことが大切であると考えた。具体的には、給食試食会、食育講演会を実施するとともに、「食育だより」などを発行し啓発活動を行った。

2 食に関する個への調査活動を行い、その結果をもとに家庭との連携しながら、個別指導の充実を図る。

①「朝ごはん調べ」をもとにした継続的指導

次頁右図のような朝ごはん調べを行い、個々の調査結果を累積し、レーダーチャートに表した個別指導カードを作

成した。そして、養護教諭を中心とした個別指導を継続したり、6年生家庭科の授業で「自分で考えて朝ごはんを食べることや調理すること」の指導に生かしたりした。個の取組により、以下のような保護者からの感想が寄せられた。

バランスのよい朝食を意識して作っています。季節がら生ものをさけるために野菜が不足しがちなので、汁物に入れたり温サラダにしたり工夫しています。あとは、きちんと一人前の野菜を食べてくれるとうれしいです。牛乳を朝飲む習慣がない分、ヨーグルトやチーズで補っています。食生活が見直せてよかったです。」

10月		
10月	主食 ごはん・パン・もち	0
10月	主菜 たまご・ハム・ベーコン・魚・納豆	3
10月	副菜 しんじょう・サラダ・おひたし・くだもの その他()	4
10月	乳製品 牛乳・ヨーグルト・その他()	0
10月	理由 たべていない ねぼうした・準備していない 食べたくない・その他()	0
10月	主食 ごはん・パン・もち	0
10月	主菜 たまご・ハム・ベーコン・魚・納豆	0
10月	副菜 しんじょう・サラダ・おひたし・くだもの その他()	0
10月	乳製品 牛乳・ヨーグルト・その他()	10
10月	理由 たべていない ねぼうした・準備していない 食べたくない・その他()	0

朝ごはん調べ

H22 ぼく・わたしのあさごはん				
名		年		なまえ
9月	3	1	2	0
10月	5	4	4	5
11月				
12月				

個別指導カード

3 PTAの各委員会と連携し、「食育講演会」「給食試食会」などを実施することで、児童生徒や保護者の食習慣、生活習慣の改善を図る。

学校給食への理解を深め、家庭とともに食育を推進するために給食試食会を実施した。

また、1学期の食に関わるアンケート調査の結果から、朝食の大切さについて家庭へ啓発していくことが重要であると考え、栄養教諭を講師とした食育講演会も合わせて行った。

○対象 1年生の保護者

○保護者の感想



給食試食会



栄養教諭による食育講演会

<「給食試食会」保護者からの感想より>

学校の給食を食べるのが初めてだったので、子どもがいつも食べている給食がどんな感じのものなのか分かり、とてもよかったです。味付けも、程よい味付けでいいと思いました。夕ご飯の時間では、給食のことが話題になって、おいしかった献立は、「家でも作って。」というので、作っています。」

<「食育講演会」保護者からの感想より>

水分補給も糖分を摂り過ぎないように気をつけることなどとても勉強になりました。給食のことですが、子どもがおいしかったとよくいいます。それを聞いて作ってみたいとよく思うので、たまにレシピをお便りにのせていただけたらうれしいです。

テーマ3 学校と地域との連携による地場産物を活用した食育推進の取組

1 地域の農業や食文化への興味・関心、食物や生産者への感謝の気持ちを高めるとともに、地域との交流を図る。

学年により、地域と連携した農業体験を設定し、これを軸にした食に関する教育活動を推進する。

1年生…トウモロコシ(苗植え→観察→収穫)

2年生…ジャガイモ(1年3月芋植え→観察→収穫→カレーパーティー→市内給食へ提供)

3年生…大根(種まき→間引き→観察→収穫→販売→パーティー)

5年生…稲作(田植え→下草刈り→稲刈り→収穫)

①地域との交流「地産地消活動」

地域との交流について、中有知小学校では「地産地消活動」を進めてきている。長年にわたって、美濃市21世紀活性化塾 塾長さんのご指導の下、さまざまな地場産物の栽培と収穫の農業体験活動に取り組んできた。これらの活動において食育についての意図的指導を行うことが、地場産物に関する興味・関心を高め、食物やその生産者に対する感謝の心を育成していくと考え実践している。

○第1学年 生活科

とうもろこしの栽培を行った。4月に「とうもろこしの苗植え」、6月の終わりには収穫を体験し、野菜を生産し収穫するよこびを味わうことができた。

○第2学年 生活科

ジャガイモの栽培と収穫の体験活動を行った。生活科「やさいをそだてよう」の単元では、ジャガイモの世話や観察に取り組み、その活動中に、栄養教諭による指導を位置付けて、ジャガイモの栄養や給食献立での調理の仕方について学習を進めた。

○第3学年 総合的な学習の時間

大根づくりに取り組み、種まき、間引きを体験した。地域の生産者の方から、大根づくりのさまざまな工夫を学ぶことで、生産者の思いに触れることができた。この大根づくりは、その後、育てた大根を収穫し、地域で販売する活動へとつながっていく。第3学年にとって、総合的な学習の時間の年間を通しての大きな農業体験活動となる。

○収穫したジャガイモの学校給食への活用

収穫したジャガイモは、地産地消活動の一環として学校給食に提供し、美濃市内の小・中学校の献立メニューとなった。児童は、自分たちが育てて収穫したジャガイモが、学校給食となる喜びを味わうことができた。また、給食センターからは献立表に載せたり、給食献立を放送で説明する原稿に載せたりして、市内全小・中学校へも広く啓発する活動を行った。



1年 トウモロコシの収穫



3年 大根の収穫

2 地域に向けて、食育推進の取組を発信する。

①収穫した大根の販売

3年生が収穫した大根は、商品として丁寧に洗い、美濃市にある道の駅「にわか茶屋」にて、児童の手によって販売した。その際、授業の中で地域の方から大根料理の作り方を学んで作った「大根料理レシピ」を同時に配付した。



大根の販売



「食育だより」「簡単レシピ」



②「食育だより」、「簡単レシピ」の配布

栄養教諭が中心となって、「食育だより」や「食育推進だより」を発行した。たよりには、これまでに学校での食育の取組や学校給食の献立への理解等といった内容について発信してきた。日々の給食の時間の様子や、食に関するアンケート調査から実態を把握し、タイムリーな話題が提供できるよう心がけた。

テーマ1～3に共通する具体的計画

1 付けたい力を明確にした指導

中心校及び協力校において、文部科学省が示す「食に関する指導の目標」と児童生徒の実態から、指定地域における「願う児童生徒の姿」を次のように設定した。

- 自らの食（食べ物、食習慣、食の知識、情報）に対する興味・関心をもつことができる。
- 食事のマナーを身に付けて、楽しく食事することができる。
- 栄養のバランスのよい食事、規則正しい食事の摂り方を理解することができる。
- 食に関する正しい知識をもとに、自ら判断して食生活の改善を図ることができる。
- 食べ物を大切にし、自然の恵み、生産にかかわる人々、給食に携わる人々への感謝の気持ちをもつ。

この願う児童生徒の姿に近づくためには、4つの付けたい力「意欲付け、知識の理解、資質・能力の向上、心の育成」を育てることが大切であると考え、「食に関する指導への位置付け」を明確にして指導を行う。

2 食育推進委員会の開催

月に1回以上の割合で、食育推進委員会を開催し、栄養教諭との連携を図ることで、年間指導計画における指導内容を充実させたり、指導の見通しを立てたりした。

3 アンケート集計より

ほとんどの家庭で朝食は確実に摂取されている。課題として、食事重要性の理解と実践力が明らかとなったため、家庭への啓発活動についても充実させた。

数字で変化のあった事項について

＜5月、10月、1月に行ったアンケート調査の結果より＞ ※中心校で実施

『食物の栄養バランスについて家庭で話題にしますか』

“よく話題にする”と回答した割合が、5月20%、10月23%、1月26%となり、家庭で栄養について話題にする家庭が少しずつではあるが増加した。

『献立を決めるときには何をもとにして決めますか』

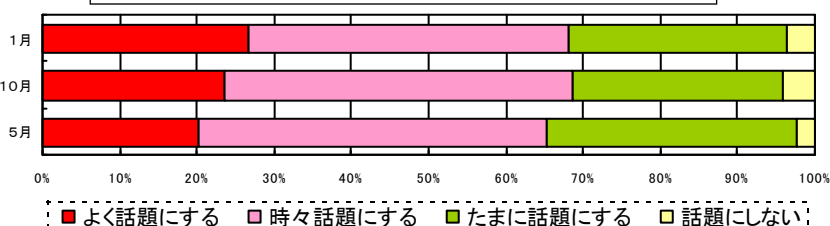
“栄養のバランスを考えて食事を作る”と回答した保護者の割合が、大きく増えている。また、「ペットボトルの飲料水は1本飲むと砂糖をたくさん飲むことになると、子どもにいわれてしまいました。」と保護者から感想が寄せられるなど、学校で児童に指導したことが保護者に伝わったこと、学校からの便りなどから保護者の食に対する意識が高揚したことなどが、変容した要因として考えられる。

『給食で嫌いなものがあるときどうしていますか』

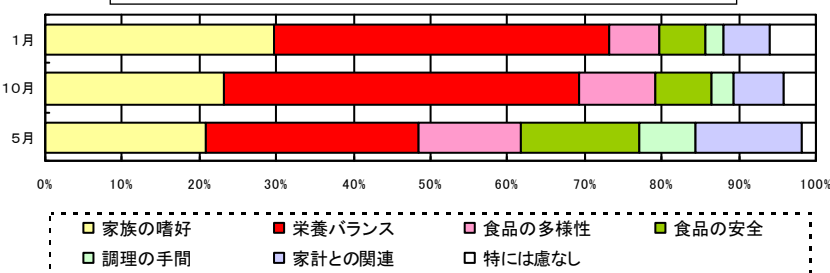
“がまんして食べる”と回答した割合が、5月47%、10月49%、1月50%となり、嫌いなものがある際にがまんして食べる児童の割合が若干ではあるが増加した。

前述した「家庭で栄養のバランスについて話題にする家庭が増えた」ことや、「授業で学習した食育のことを児童が家庭で話題にするようになった」ことなどからも、児童が食の重要性を知ったことが、何でも食べようと努力する姿となって表れたのではないかと考えられる。

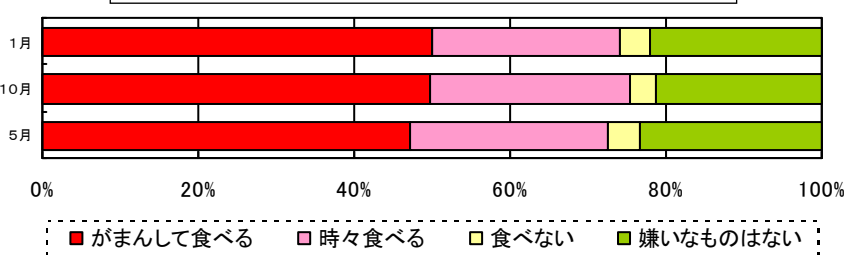
食物の栄養バランスについて家庭で話題にしますか



献立を決めるときには何をもとにして決めますか



給食で嫌いなものがあるときどうしていますか



事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・栄養教諭が校内食育推進委員会や校区の食育推進会議に参加したり、担当者と連携したりすることで、その担当者が組織の中で食育を意図的・計画的に推進することができるようになり、学校の組織を機能させた食育指導を行うことができた。
- ・学校がこれまで行ってきた地域の農家と連携した教育活動に、栄養教諭がかかわったことにより、農業体験を中心とした学習活動から、食を深く考える学習活動へと高めることができるようになった。
- ・食育の授業を保護者に公開したり、児童が家庭で話したり、食育推進チラシの配付をしたりしたことで、食育について関心をもつ保護者が増えてきた。
- ・児童が学校で学習してきたことと保護者へ啓発してきたことが家庭で話題となったり、地域の協力者と保護者とが日常会話の中で食育を話題にしたりするなど、「授業での指導の充実」「保護者への啓発活動」「地域と連携した活動」を同時に行ったことにより、相乗的に食育に対する意識が高まった。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- ・学年の発達段階に応じて、どのような指導が必要であり可能であるのか、食に関する指導計画の検証と改善を学校が十分理解しておくことが大切である。そのための研修も必要となる。
- ・食に関する実態は、家庭によって全く異なるため、家庭の状況に応じた指導内容や指導方法を吟味する必要がある。
- ・本事業の成果を美濃市全体の食育推進に活かしていく必要がある。